



Title	芒亭書屋談叢
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報, 94
Issue Date	1936-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77667
Type	article
File Information	A018_02_03all_Part29.pdf



芒亭書屋談叢

此の十月は此の邊の農村では祭の月である。佐藤信淵の田畠年中行事卷下の田畠常務第十の章は、農村の十月の行事を書いたものであるが、そのうちに次の様な一節がある。「凡そ農民は愚直なる者にて幾日こそは神事にて賞豫を存分に極むべし。然れば其の前に骨を折て諸事皆能く調置べしと諭す時は衆人談合して互に相勵み、一日二三口の業を仕終事あり。蓋し百姓を率育するに、年中唯一向に農事を勉強すべきのみを下知して時々遺悶を爲しむるの仁政なければ、心氣の活潑する事無くして必ず蘊結し、農業を勤むるの適悦^{おもしろ}からざるよりして云々。」又曰く「……鎮守祭の拜殿に於て酺禮^{おもしろ}を行ひ、乃ち神輿を昇出し鐘、大鼓、大角等を鳴らし、大噪を爲て郷里を練行かしむべし。實是知しむべからざるの玄機にして、卒知の民を愚直に復すの妙道なり。故に我家の農政學は祭禮新式を奥祕の傳とせり。」

農村と農民に關する信淵の識見には自ら頭が下るものが多いけれども、江戸時代の農政學者が皆さうであつた様に、彼も亦農民を人として尊敬する所以を忘れて居た様である。

農村は農業が營まれてゐるところであると共に、人々が生活して居るところであると云ふ事を忘れてはならぬ。農民は農業者であると共に亦人である事を忘れてはならぬ。まして農民は江戸時代に於ても、領主への納租者としてのみ見るべきではなかつた筈である。

農村の秋祭りは五穀豐穰に對する神への感謝であり、自己の制作の完成の歡喜である。自然の誠と人の誠の合作が今や完成した喜びの抑へきれぬ表はれである。

秋の靜なる夜、遠いところから聞えてくる村祭の太鼓の音を聞き入る時、私はいつも妙に感傷的になる。そして農民に祝福あれと心から祈るのである。(芒亭)